

古文 読解問題「大鏡・南院の競射」①

帥殿の南院にて人々集めて弓^(a)あそばししに、この殿渡らせ給へれば、思ひかけずあやしと、中関白殿おぼし驚きて、いみじう饗応し^(b)申させ給うて、下臘におはしませど、前に立て奉りて、まづ射させ奉らせ給ひけるに、帥殿の矢数今二つ劣り給ひぬ。中関白殿、また御前に^(c)候ふ人々も、^①「いま一度延べさせ給へ。」と申して、延べさせ給ひけるを、やすからずおぼしなりて、「さらば、延べさせ給へ。」と仰せられて、また射させ給ふとて、仰せらるるやう、「道長が家より、帝・后立ち^(d)給ふべきものならば、この矢当たれ。」と仰せらるるに、^②同じものをを中心には当たるものかは。次に、帥殿射給ふに、いみじう臆し給ひて、御手もわななくにや、的の辺りにだに近く寄らず、無辺世界を射給へるに、関白殿、色⁽³⁾青くなりぬ。また入道殿射給ふとて、「摂政・関白すべきものならば、この矢当たれ。」と^(e)仰せらるるに、初めの同じやうに、的の破るばかり、同じ所に射させ給ひつ。饗応し、もてはやし聞こえさせ給ひつる興もさめて、こと苦うなりぬ。父大臣、帥殿に、「なにか射る。な射そ、な射そ。」と制し給ひて、ことさめにけり。

問一 次の文章は『大鏡』について説明したものである。空欄(一)～(四)の中に入る言葉を答えなさい。

『大鏡』は(一)時代に書かれたとされる(二)物語である。文徳天皇から後一条天皇までの十四人の天皇が在位した期間の歴史を、(三)と(四)が対話し、それを若侍が批評するという形式で書かれている。

問二 傍線部(a)～(e)の敬語の種類と敬意の方向(誰から誰への敬意か)を答えなさい。

問三 傍線部①「いま二度延べさせ給へ。」と申し」とあるが、なぜそのように関白殿は申したのか、次の選択肢から最も適切なものを選びなさい。

- ア. 競射を天皇や皇后が見ていたため、伊周が負けると自分の権威が失墜すると考えたから
- イ. 競射をする時間を延ばすことによって、息子である伊周の優秀さを周りに示そうとしたから
- ウ. 競射を延長することで、道長の実力を伊周に見せ、日々の鍛錬に対する姿勢を正そうとしたから
- エ. 競射を延長し、道長に故意に外させることで、伊周を勝たせようとしたから

問四 傍線部②「同じものを中心には当たるものかは」を現代語訳しなさい。

問五 傍線部③「青くなりぬ」の文法的説明として適切なものを選びなさい。

- ア. 形容詞 + 断定の助動詞 + 打消の助動詞 イ. 形容詞 + 断定の助動詞 + 完了の助動詞
- ウ. 形容詞 + 伝聞の助動詞 + 完了の助動詞 エ. 形容詞 + 四段動詞 + 完了の助動詞

読解問題「大鏡（南院の競射）」① 解答・解説

問一. (一) 平安 (二) 歴史 (三) 大宅世継 (四) 夏山繁樹

※ (三) (四) は順不同

問二. (一) 平安 (二) 歴史 (三) 大宅世継 (四) 夏山繁樹

※ (三) (四) は順不同

問二. (a) 尊敬語

筆者（語り手）から帥殿（伊周）への敬意

問二. (b) 謙譲語

筆者（語り手）から入道殿（道長）への敬意

問二. (c) 謙譲語

筆者（語り手）から中関白殿（道隆）への敬意

問二. (d) 尊敬語

入道殿（道長）から帝・后への敬意

問二. (e) 謙譲語

筆者（語り手）から入道殿（道長）への敬意

問三. エ

…道隆が道長に対し、わざと外させ伊周を勝たせるという恭順の意を示す機会を与え、道隆たちの面目を保つよう促した

問四. 同じ当たるにしても的の中心に当たるではないか

問五. エ